

英語科

高校2年および3年における 学力差を考慮した英語指導

山本 岩 男

1. 英語の学力差と習熟度別クラス編成

本校では20余年前より高校3年時において英語ⅡBにあたる週3時間の授業（Rと呼ぶ）を習熟度別に3段階に編成して行っている。習熟度別指導を行っている理由は本校英語科が学力差の大きい集団に対して一斉指導よりも効果が上がると考えているからである。具体的には成績下位クラスの生徒に対して基本的事項の解説や練習、英文の構造把握、小テストのために時間を十分かけて指導できるし、一方上位クラスではそれらの時間を省いてより多くの文章をより深く理解し、単語、連語なども多く習得できるよう指導できるということである。

61年度高3については高校2年次より英語Ⅱの教科書を用いた週3時間の授業で2段階の習熟度別指導を試みた。（その理由、実践報告と成果は本校紀要第31集の拙稿「高校2年次における習熟度別指導の試み」を参照していただきたい。）以下、高校2年次より継続して3年次に3段階の習熟度別クラス編成で行ったRと、通常のホームルームクラス単位で行った英語ⅡとⅡCの教科書を用いた週3時間の授業（CGと呼ぶ）での実践とそれについての生徒の反応を中心に、本校として初めて2年次、3年次にわたって習熟度別指導を行ってみた成果を報告する。

2. 61年度高校3年生に対して行われた授業形式

- A CGの授業（週3時間）：ホームルーム単位
教材：Creative Writing CourseⅡC（第一学習社）
総合演習（第一学習社）
Main StreamⅡ（増進堂）
実戦トレーニング英単語（中央図書）
重要英語発音・アクセント700選（数研出版）
- B Rの授業（週3時間）：習熟度別クラス編成
クラス編成：αクラス—48名
βクラス—43名
γクラス—36名
教材：Senior SwanⅡ（開拓社）

整理と活用 英語構文（数研出版）

注）α、β、γ各クラスは高校2年次英語成績上位、中位、下位の生徒で構成されている。2学期初めに若干名の生徒が能力により適当なクラスに移動した。α≧β、β≧γ

3. 授業の内容

A. CGの授業における学力下位層を意識した指導年間を通じた指導計画

- 4月 「実戦トレーニング」のチェックテスト
5 英語Ⅱ 「Main Stream」, 「総合演習」の1回目残り
6 文法項目「仮定法」, 「特殊構文」
7 自由英作文
8
9 英語Ⅱ 「Main Stream」, 「総合演習」の2回目
10 英語ⅡC 「Creative Writing Course」
11 自由英作文
12 英語の発音, アクセント
1

授業の手順は教材によって大きく異なるがCGのC（=Comprehension or Composition）の英語Ⅱの教科書を用いた授業は次のとおりであった。

- 1) 「実践トレーニング」のチェックテスト（1学期）
- 2) 前時の復習（日本語のQAによる概要確認）
- 3) 本時の学習
 - ①新出語句の発音練習
 - ②本文の聞きとり（テープによる）
 - ③音読練習
 - ④詳しい解釈、構文把握のポイントの説明

（自作予習プリント Study Guide 使用）

通常のホームルーム単位での授業なので、特に中位～下位の学力層の生徒たちが興味をもって基本的事項の復習から学習できるように配慮した。具体的には英語Ⅱの教科書の2年次で読むことができなかった課のうち、生徒が興味をもてる課を選んでその他を省略したこと。予習および授業中に文法、語法面での目つけどころがわかるように、また文脈を把握するために指示語の内容、論旨を明確にするポイントを設定した

自作プリントStudy Guideを使用した。(資料-1)

英語ⅡCの教科書を用いた授業は次の手順で行った。

- ①実戦トレーニングのチェックテスト(1学期)
- ②前回の授業で学んだ重要表現を覚えているかどうかを確認する小テスト
- ③練習問題A, Bの答え合わせ(口頭)
- ④練習問題Cの答え合わせ(指名された生徒が自分の考えた英文を板書する)
- ⑤山本が板書された英文をチェックし、解説を加える。

ここでも基本的な表現の定着をはかるために毎回小テストを行い、練習問題C(和文英訳)では語彙レベルでのつまづきをできるだけ避けるために、使用度の低い特殊な語句、表現について自作のプリントでヒントを与えた。(資料-2) また、とにかく英作文に対する抵抗感をなくすために自由英作文「Golden Week」, 「Summer Vacation」, 「The Most Impressive Experience In My High School Life」などのタイトルで80語以上書くことを課した。添削の時にもあまり細かい点についてはふれず、自分の考えを英語の文章で誤解のない程度に表現できることを目標とした。(資料-3)

CGのG(=Grammar for Comprehension)にあたる授業は次の手順で行った。

- ①「実戦トレーニング」のチェックテスト(1学期)
- ②特定の文法項目について1, 2年の復習, 新出事項の要点を示したプリント Study Guideで解説(資料-4)
- ③Study Guideにのっている練習問題と解説
- ④「総合演習」の答え合わせと解説

上記の手順は文法項目「比較」, 「特殊構文」の授業のものである。山本は61年度高3が2年生の時にもCGの授業を担当し、英作文の練習と文法項目の復習と読解への応用を指導したが、主要文法項目のうち「比較」, 「特殊構文」についてはカバーできなかったため3年生の1学期に持ち越した。「総合演習」を用いた授業は主に家で予習した問題の答え合わせと、それについての教師の説明という形式であった。この教材は主要な文法項目について4ページ(前半2ページは例文と基本問題で後半2ページは応用問題)ずつで構成されていて、2年生の時には各項目の前半ページを終えていたので3年次では後半の2ページずつを考えていった。これも学力下位層の生徒たちが複雑な文法の理解において消化不良をおこさないように文法の基礎を一通り学習した後、さらに細かい文法、英文解釈への応用をめざした配慮であった。

12月, 1月に行なった英語の発音, アクセントについての学習は中学, 高校での音声面での指導の復習と、

受験を控えて授業をおさなりにし、受験勉強に心が傾いてしまう傾向に対して短期間で得点力アップにつながる内容ということで行った。授業ではまず最初の10分間で日本人には聞きとるのも発音するのも困難な[l], [r], [θ], [ð]などの聞きとりと発音の練習をテープとプリントを用いて行い(資料-5)次に「重要英語発音, アクセント700選」で使用度が高く発音, アクセントの誤りやすい語の発音練習と意味の確認をした。残った時間で発音, アクセントの練習問題の答え合わせをしながら山本が解説するというパターンであった。

これらの他にも生徒の英語への興味, 関心を高めること, 集中力の欠けがちな学期の始まりと終わりの時期の授業で生徒をリラックスさせながら自然に英語学習に注意を向けさせるという目的でその時に流行していた英語の歌を聞かせた。その際、歌詞の一部を消しておいてテープを聞きながら書きとるという簡単な聞きとりの練習も行った。使用した曲は次のとおりであった。「We Are The World」, 「Papa Don't Preach」, 「Take My Breath Away」, 「Sound Of Silence」

〔アンケートの結果〕 (%)

1) 「実戦トレーニング 英単語」のチェック テスト	とよもつた 0	まあつた 20	かつつ 30	あまりよく 26	まったく 24
2) 「総合演習」の 授業	1	30	52	15	2
3) Creative Writing Course」の授業	1	13	43	35	8
4) 発音練習のテープ	12	23	52	11	2
5) 発音, アクセントの 練習問題	12	25	48	10	5
6) 歌を聞いたこと	24	35	32	5	4

B. Rの授業

高校2年次の習熟度別指導では上位, 下位という2段階のクラス編成だったが, 3年次は上位, 中位, 下位という3段階に分けて学力に応じてよりきめ細かな指導を行った。そのうち特に学力層に応じて指導の内容が異なるのはα(上位)クラスと, γ(下位)クラスである。山本はαクラスを担当したので以下にその授業について報告する。なお62年度は山本が高3のγクラスを担当して, その指導法を研究中である。その成果は次の機会に発表したいと考えている。

(a) αクラスの指導

速読と精読の区別をはっきりさせてより多くの文章を読むことと, より正確に深く読むことをめざした。使用した教科書は3部構成で第1部が語義の推定, 文脈把握などのための練習問題, 第2部が比較的やさし

い文章、第3部がやや難解で内容の深い文章から成っていて、1部と、2部あるいは3部を並行して進めた。2部、3部の教材は難易度、内容を考慮して精選したものだけを読んだ。特に2部については α クラスの生徒たちは英文の構造に関する詳しい説明や、語句の意味の確認、和訳が不必要なことが多いのでStudy Guide(資料-6)のチェックポイントを確認しながら全体の内容把握を中心に速読をめざした。また教科書の内容に関連する記事を英文雑誌から抜粋して英語を通じてより幅広い知識を得ることを試みた。(資料-7) 授業の手順はおおむね次の通りだった。

- 1) 第1部の練習2ページ分の答え合わせ
- 2) 前時の復習(日本語による内容確認)
- 3) 本時の学習
 - ①新出語句の発音練習
 - ②テープによる聞きとり
 - ③音読練習
 - ④日本語による概要把握のためのQA
 - ⑤Study Guideのチェックポイントを確認しながら細かい解釈と説明

副教材「整理と活用 英語構文」を用いた授業では英文の構造を正確につかみ、正確に意味を理解することをめざして英文解釈の練習をした。授業の内容は練習問題の答え合わせ、英文和訳と教師による要点の解説が主であった。以上のように α クラスでは教材の種類を増やしたり、小テストをしたりすることなくひたすら1年間速読と精読に集中的に取り組んだ。

[アンケートの結果] (%)

	とてもよかつた	まあよかつた	ふつう	あまりよかつた	まったくよかつた
1) 「Senior Swan」を用いた授業	0	15	59	21	5
2) 「整理と活用 英語構文」を用いた授業	23	38	18	15	5
3) Study Guideなどのプリント	18	34	37	11	0

4. 学力の評価について

CGの授業は全生徒共通なので定期試験は全員共通問題で行った。授業中の小テストの成績も学期末の評価の20%分の対象となったが、定期試験の成績が主な判定材料であった。Rの授業は習熟度別の各クラスで教材の進度、内容とも大きく異なっていたために共通問題はいっさい設けず、各クラス全く別の問題で定期試験を行った。そしてその評価はCGの成績をおよその基準として粋を設定した上で判断した。たとえばRにおける γ クラスの生徒のCGの成績が10段階評価で3~7に分布しているとすれば、彼らのRの成績も定期試験で50~90点をとる生徒や20点しかとれない生徒も含めて3~7の評価内におさまるようにした。

5. 実践をふり返って

A. アンケートの結果

3学期末に全員を対象としたアンケート調査を実施した。[表-1]はCGの授業、テストに対する評価を示し、[表-2]はRにおける習熟度別学習に対する意識と授業、テストに対する評価を示している。

(a)CGの授業内容、テストについて

CGについてのアンケートも[表-1]のようにRのクラス別に結果を出してみた。当然予想されるようにCGでもRのクラスが $\gamma \rightarrow \beta \rightarrow \alpha$ と習熟度が上がるにしたがって授業がわかる生徒の割合が高くなっている。学力下位層を意識して授業を工夫したはずだが、アンケート項目1でエ、オと答えている生徒が γ クラスで $\frac{1}{2}$ もいて、程度の差こそあれ、授業についていけないとした生徒がいたことはおおいに反省しなければいけない問題である。アンケート項目2の定期テストについても全体的に難しいと感ずる生徒が多いということは正しい評価をする、勉強すればそれなりの評価が得られるという学習意欲を高める点で注意しなければならぬと思われる。

[表-1] 高3 CGについてのアンケート

アンケート項目			α	β	γ
1	授業の内容に	ア よくついていけた	3	5	0
		イ 大体ついていけた	53	25	3
		ウ どちらともいえない	38	52	65
		エ ついていけないことが多かった	3	10	26
		オ とてもついていけなかった	3	8	6
2	定期テストの問題は	ア とても簡単だった	0	0	0
		イ 少し簡単だった	6	10	3
		ウ ふつう	74	52	45
		エ 少し難しかった	21	33	26
		オ とても難しかった	0	5	26

(注: α , β , γ というのはRのクラスの α クラス, β クラス, γ クラスの生徒のことである)

[表-2] 高3 Rについてのアンケート

(%)

アンケート項目				α	β	γ
3	授業の内容に	ア	よくついていけた	3	5	9
		イ	大体ついていけた	56	44	39
		ウ	どちらともいえない	28	33	43
		エ	ついていけないことが多かった	13	10	9
		オ	とてもついていけなかった	0	8	0
4	定期テストの問題は	ア	とても簡単だった	0	5	4
		イ	少し簡単だった	8	3	17
		ウ	ふつう	61	60	67
		エ	少し難しかった	21	21	8
		オ	とても難しかった	10	11	4
				α	β	γ
5	習熟度別学習について どう思いますか。	ア	賛成	55	41	38
		イ	どちらでもない	43	44	50
		ウ	反対	2	15	12

それはなぜですか

[賛成]

- 能力別のほうが授業も楽しいと思います。(わかるから) [γ]
- 一緒に授業をするとできない子よりできる子の速度に合わせてしまうのでできない子はますますできなくなるから。

[γ]

- うちの学校は学力差が激しいから。 [α]
- 授業がよく進む。 [α]

[反対]

- 白い目で見られる。 [γ]
- やる気をなくす。 [β]
- ただでさえ学力の差がついているのに学力別に分けられてはおいつけなくなってしまう。 [β]

				α	β	γ
6	もし習熟度別学習をするとしたらどの学年が適当だと思いますか。	ア	3年だけ	18	30	4
		イ	2, 3年	46	27	39
		ウ	1, 2, 3年	21	22	30
		エ	その他	15	23	27

それはなぜですか。

[ア] 1, 2年のうちにやると友達の間でもランクづけのような意識ができてよくない。 [β]

[イ] 自分がそうだから。 [γ] / 今までやってみて良かったから。 [γ]

[ウ] 2, 3年の半端な時期から始めるより, 高校入学という区切りから始めた方がよい。 [β]

[エ] 1年だけ。そして1年のうちに学力差を縮めるような授業をする。

				α	β	γ
7	もし習熟度別学習をすればとしたら何段階に分けるのがよいと思いますか。	ア	2段階	8	21	17
		イ	3段階	77	63	65
		ウ	その他	15	16	18

それはなぜですか。

[ア] 3段階だと1番下のクラスがはなれすぎて上のクラスに上がったときについていけなくなる。 [β]

[イ] ホームルームが3クラスあるから。 [γ]

[ウ] 6段階 (とにかくもっと細かく)

(b)Rの授業内容、テストについて

前ページの〔表-2〕アンケート項目3の結果によると各クラスとも約半分の生徒が授業についていけないこと、ついていけなかったとする生徒はそれと比べてはるかに少ないことがわかる。また項目4からは γ クラスでは定期テストを難しいと感じる生徒の割合が α 、 β クラスと比較してかなり少ないことがわかる。つまり γ クラスのテストは(a)で述べたように学習意欲を高めるといって適切だったと思われる。

(c)CGとRの授業、テストに対する評価を比較して学力差の大きい通常クラス単位で行われるCGの授業では学力下位層を意識してこれまで述べたようにいろいろ工夫してみたがやはりRの γ クラスにあたる生徒にとってはついていけなかった(エ、オ)とする生徒が $\frac{1}{2}$ もいて学力差の大きい集団に対する通常のホームルーム単位での授業の難しさがわかった。一方Rの授業について γ クラスの生徒でそのように答えた生徒の割合は10%以下で生徒の習熟度にうまく対応した授業内容だったことがわかる。またRの α クラスにあたる生徒にとってはCGの授業もRの授業も大体あるいはよくついていけたとする生徒の割合は同じくらいだが、ついていけなかった(エ、オ)と答えた生徒の割合を比べるとRの授業についての方が多かった。これはCGよりRの授業の方が進度も速く、内容も難しかったためと思われる。

(d)60年度の授業との比較

まずCGの授業について、60年度も山本が担当したが、本校紀要第31集の101ページ〔表-2〕を見るとわかるように学力下位層では60%の生徒が授業についていけないことが多かったり、とてもついていけなかったと答えているが、61年度の授業についてそのように答えた生徒はRの γ クラスにあたる生徒のうちで30%程度となった。学力下位層を意識したCGでの実践の効果がここに現れていると思われる。Rの授業は60年度は α_1 、 α_2 、 β という2段階の習熟度別指導だったが、61年度は3段階となったためより生徒の学力に対応した指導がなされた結果、全体的に授業内容についていけた(ア、イ)と答えた生徒が増加し、ついていけなかった(エ、オ)と答えた生徒は減少した。

B. 昨年度からの課題について

本校紀要第31集の拙稿「高校2年における習熟度別英語指導の試み」の終わりに、今年度検討すべき問題を次のようにあげておいた。

- ①学力差の大きい通常クラス単位でのCGの授業方法
- ②生徒の習熟度別クラスのクラス替えの方法
- ③習熟度別指導を受けた生徒の評価方法
- ④2年から習熟度別指導することの学力への効果

まず①については5のAで述べたように学力下位層を意識した実践によって、ついていけなかったと答えた生徒の割合は半分近くに減ったが、Rの γ クラスにあたる生徒の $\frac{1}{3}$ は今年度のCGの授業もついていけなかったと答えていて、よりいっそうの研究が必要だと思われる。②について、3学期は生徒の登校するのが1か月程度なのでクラス替えは結局1学期の終わりの1回しかできなかった。方法はまず α 、 β 、 γ の各クラスを担当した先生に各クラスの中で成績不振者、優秀者を選んでもらい、各人についてクラスが変わった方が好ましいかどうか相談した後、山本が本人と面接をして、よく納得した上でクラスを替わるという方式をとった。③について、4で述べた方法ではCGと比べて特にRに力を入れて勉強した生徒がそれにふさわしい評価を得られないこともありうるのでまだまだ改善の余地が十分あると思う。④について、英語の学力を到達度を基準にして測定できないか考えてみたが、読み、聞き、話す力、あるいは語彙数、文法の理解度を示す基準や、どうやって到達度をはかるかという方法を何らかの形で作成したいと考えている。そういったものがあれば生徒自身も自分の学力の変化が客観的によくわかって学習する励みになると思う。

C. 結び(高2、高3次の指導を通じて)

学力差の特に著しい61年度高3に対して、本校で初めて高校2年次より英語のRの授業にかぎって習熟度別指導を行ってきた。高校2年次における指導については本校紀要の拙稿を参考にさせていただきたい。習熟度別指導に対して感情的に反対していた学力下位層の生徒がよくわかる授業を受けることができた結果、肯定的な意見をもつようになったと報告されている。それにひき続き、61年度の高校3年次における学力差を考慮した指導の内容の成果をまとめてみた。中学校時代から生活指導上の問題が多く、学力差がどの教科も大きい学年の生徒集団に対していかに英語の学力を全体的に向上させるかということを経験して検討し、高校1年次より学力下位層を意識してさまざま工夫を試み、2年次からRにおける習熟度別指導もその1つであった。2年間習熟度別学習を体験してみてそれについてどう思うかという質問に対する答が〔表-2〕のアンケート項目5にまとめられている。全体的に賛成の割合は45%程度、反対は10%弱ということは生徒たちも習熟度別指導を受け入れていると思われる。しかし、これで大成功というわけではない。単純に学力を伸ばすためにはこのような指導は合理的と思われるが、項目3の反対意見に代表されるような人間関係への影響や、意欲の低下といったマイナス面も存在することを忘れてはならない。これらのマイナス面、大きな学力差とともに大部分の生徒が進学するという現状を考

慮したうえで習熟度別指導を行うとしたら、どの学年でどのようにするべきか、今後も考えていかななくてはならない。61年度高3の生徒たちの意見はアンケート項目6, 7の通りだった。これらも参考にしてより適切な指導をめざして努力したいと考えている。なお、以上に報告した実践研究は文部省科学研究費の補助を受けたので付記しておきたい。

(資料-1)

STUDY GUIDE 8 The Strawberry Season
Check Points

P.180

1. 2 helpingは分詞 or 動名詞?

I helped him (to) wash his car. (訳せ)

5 as many as = () () than

7 going from one farm to the next……
= () they ()

14 whoever=any person ()

15 as loudly as he could
= as loudly as ()

19 The girl…… shed.の文型は

P.182

1. 4 herself : (何のことか)

6 Another…'strawberry-slapping'.
文型は

14 that の内容は

16 being の働きは

17 stop は自動詞 or 他動詞?

18 that の内容は

19 it の内容は
get の意味は

21 = Fanny Forbes got () ()
strawberry-slappings of all girls.

(資料-2)

参考にして下さい

P.79のCの問題

1 彼の感情を害する : offend (hurt) his feeling

2 結論 : conclusion

3 ~という証拠があるかね : Do you have any
proof that~

4 遠征 : expedition

(資料-3)

The Most Impressive Experience In My High
School Life

I have experienced many things since I entered

this school. In those things the most impressive experience is the school festival because I pushed our homeroom plan actually though I am rather a passive person. When I said, "I'll be in charge of planning," in April, I never dreamed that it was such difficult to succeed. To our pity, we called off the first plan. And then we were in trouble because the next plan was not decided easily. But thanks to each efforts of our classmates and your help, at last, an enjoyable plan was done. I think it was successful. Besides, we won the prize at the chorus contest. I'm very happy. And I shall never forget these things.

(資料-4)

STUDY GUIDE 1 "Comparison"

Review

A 原級

1 He is as tall as his father.

2 He is not as tall as his father.

3 His father is twice as old as he is.

4 I ran as fast as I could.

5 He gets up early.

B 比較級

1 He is taller than his father.

2 Mr. Tomita is more kind than strict.

3 The older she gets, the more beautiful she looks.

STUDY GUIDE 2 "Comparison"

New Material

A 比較級を用いた構文

1 A typewriter is less useful than a word processor.

= A typewriter is not as useful as a word processor.

2 Mike is the taller of the two.

3 You are seven years younger than I.

= You are younger than I by seven years.

B 最上級を用いた構文

1 Japan is the third largest economic unit in the world.

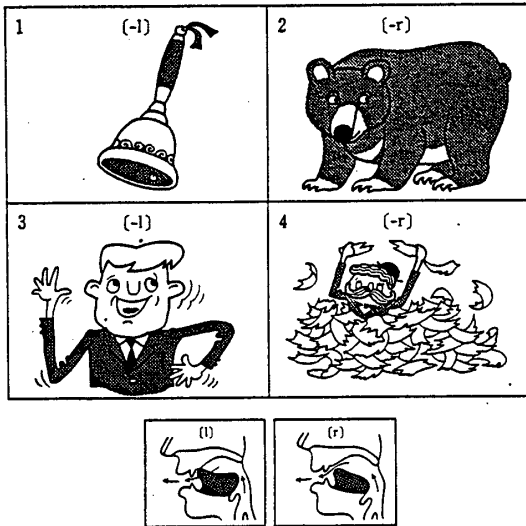
C 書き換え (原級, 比較級→最上級)

1 Nothing is { as (so) precious as } time
{ more precious than }

= Time is the most precious of all things.

- 2 No (other) animal is
 { as (so) faithful as }
 { more faithful than } a dog.
 = A dog is the most faithful of all animals.

(資料-5)



1. bell [bel] (名) 鈴, ベル
2. bear [beə] (名) 熊
3. tell [tel] (動) 話す
4. tear [teə] (動) 裂く, 破る

39. 次の10組には、単語の下線部の発音が3語とも同一のものが3組、3語とも異なるものがあります。それらの番号を、番号順に答えなさい。

- | | | | |
|--------------------|------------------|-------------------|---------------------|
| 1. { <u>charm</u> | 2. { <u>bird</u> | 3. { <u>grove</u> | 4. { <u>dear</u> |
| { <u>harm</u> | { <u>herd</u> | { <u>glove</u> | { <u>fear</u> |
| { <u>warm</u> | { <u>heard</u> | { <u>prove</u> | { <u>mere</u> |
| 5. { <u>food</u> | 6. { <u>beef</u> | 7. { <u>bury</u> | 8. { <u>shudder</u> |
| { <u>wood</u> | { <u>leaf</u> | { <u>burden</u> | { <u>muddy</u> |
| { <u>stood</u> | { <u>deaf</u> | { <u>bureau</u> | { <u>pudding</u> |
| 9. { <u>London</u> | { <u>advise</u> | | |
| { <u>thunder</u> | { <u>precise</u> | | |
| { <u>wonder</u> | { <u>replies</u> | | |
- (成城大)

(資料-6)

STUDY GUIDE 4 "Animal Language"

P.78

- 1.5 Some.....system.
 = it

P.79

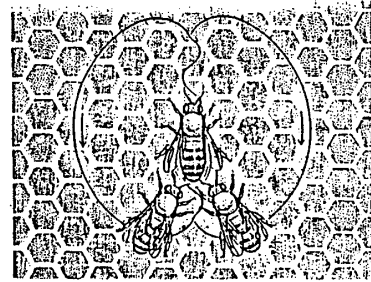
- 1.1 this とはどんなことをさしているか
 1.7 bees' の意味
 1.9 The dance was.....food.の文型は
 communicate の目的語は
 that の働きは

itは何をさすか

P.80

- 1.8 themは何をさしているか
 1.13 asの意味は
 1.19 The line.....food.の文型は

(資料-7)



WAGGLE DANCE of the honeybee, first decoded by Karl von Frisch in 1945, is performed by a foraging worker bee on its return to the hive after the discovery of a food source. The pattern of the dance is a repeated figure eight. During the straight run in the middle of the figure the forager waggles its abdomen rapidly and vibrates its wings. As is shown in the illustrations on the opposite page, the direction of the straight run indicates the line of flight to the food source. The duration of the straight run shows workers how far to fly.